

# 研究報告 第 149 号 摘要一覧

---

## 神奈川県で分離したカブモザイクウイルス (TuMV) の特性

神奈川県平塚市内で栽培されているダイコン及びキャベツのモザイク症状株から TuMV-KR 株及び KC 株を分離し、これらの性質について、TuMV-JO 株と比較検討した。JO 株及び KR 株はいずれもダイコンに感染したが、KC 株は感染しなかった。一方、KC 株はキャベツには全身感染したが、JO 株及び KR 株は感染しなかった。次に分離株間の血清関係をウエスタンブロット法により比較したところ、3 分離株とも明確な反応を示すとともに、外被タンパク質(CP)の泳動度にも差は認められなかった。分離株間の CP 遺伝子の相同性は、JO 株と KR 株とは 87.9%、JO 株と KC 株とは 96.7%、KR 株と KC 株とは 88.8%を示し、KC 株は JO とより近縁であることが示された。

## スイートピー新品種'リップルシリーズ'

既存の冬咲き性品種に無い特徴を持つ品種の育成を目的として交雑育種に取り組んだ。1996 年に'当所育成系統 367-1-(1)'×'WiltshireRipple'及び'当所育成系統 365-1-(7)'×'LilacRipple'の組み合わせで交配を行った。以降、冬咲き性で花卉に吹きかけ型斑紋を有する個体の自殖を繰り返し、F6 で冬咲き性で旗弁の地色が黄白で斑紋色が明紫、F7 で冬咲き性で旗弁の地色が黄白で斑紋色が明紫赤及び旗弁の地色が黄白で斑紋色が暗紫赤の系統を得た。いずれの系統も既存の冬咲き性品種には見られない花卉に吹きかけ型条斑をもち、花卉の波打ち程度が大きいオープン花である。生育、開花は安定しており、栽培後期にも切り花本数の減少は少ない。これらの系統を'リップルラベンダー'、'リップルピーチ'及び'リップルショコラ'と命名し品種登録に出願し、2005 年 3 月 14 日に'リップルラベ

ンダー',2006年2月27日に'リップルピーチ'及び'リップルショコラ'が品種登録された。

## アオキ新品種'湘南おりひめ'・'湘南ひこぼし'の育成

'湘南おりひめ'は,1980年に'細葉アオキ'と'ホシヤドリ'の交配により育成された品種で,2004年9月に種苗法による品種登録申請を行った。葉身の形は長楕円形で,葉色は暗黄緑,浅黄の散り斑が入る。性は雌性で,4月上旬に雌花を咲かせる。果実は4月頃,濃橙赤で楕円形のものを1枝当たり2.6個ほど付ける。

'湘南ひこぼし'は,1985年に'細葉アオキ'と'龍福寺'の交配により育成された品種で,2004年9月に種苗法による品種登録申請を行った。葉身の形は長楕円形であり,葉表面の色は暗黄緑,浅黄の散り斑が入る。性は雄性で,3月下旬に雄花を咲かせる。

いずれの品種も,鑑賞樹として耐寒性,耐陰性に優れ,日陰地や屋内などでの利用が期待される。

## ダイコンわっか症に対する有望薬剤の選抜と散布適期

ダイコンわっか症に対する防除有望薬剤の選抜と処理時期について1998～2004年にかけて検討した。TPN水和剤を含む9種水和剤と1種の土壌混和剤を用いた有望薬剤の選抜試験の結果,TPN水和剤,カスガマイシン・銅水和剤,ジチアノン・銅水和剤,シアゾファミド水和剤,アゾキシストロビン水和剤,メタラキシル・マンゼブ水和剤,シモキサニル・ファモキサドン水和剤,メタラキシル・TPN水和剤,アゾキシストロビン・TPN水和剤は白さび病およびわっか症防除用散布剤として高い防除効果を示した。メタラキシル粒剤を用いた播種時土壌処理の白さび病およびわっか症に対する防除効果はTPN水和剤散布と比べ効果は劣るものの効果は認められた。

防除最適時期の検討には TPN 水和剤を用い、1998、'99、2000 および'03 年の冬ダイコン 4 作に試験した結果、間引き 7～30 日後(10月中旬～11月上旬)の間に 1～2 回の散布を行うとわっか症の防除に有効であった。

## 栽植密度、整枝法及び土壌水分がニガウリの収量と品質向上に及ぼす影響

ニガウリは栄養価が高く健康野菜として、近年消費量や栽培面積が伸びている。三浦半島地区においても新たな夏野菜として導入された。しかし、その栽培方法については十分に確立されていない部分が多い。ニガウリは茎葉が繁茂しやすいために、葉の重なりによる色むらなど果実品質の低下、病害虫の発生などの問題が生じた。そこでニガウリの収量と品質の向上をはかるため、栽植密度、整枝方法、土壌水分について検討した。

- 1)栽植密度については、狭いほど収量は増加するが作業性は低下した。
- 2)整枝法については、親づるを 7 節で摘心後、1.子づる 4 本を 1.5m 伸ばして摘心し、孫づるを半放任状態で伸ばし、孫づるで収穫を行う子づる摘心栽培、2.子づる 4 本を主枝として孫づるはすべて摘心し、子づるのみで収穫を行う孫づる摘心栽培、3.子づる 4 本を主枝として、雌花の多い孫づるをある程度残し、孫づる及び子づるで収穫を行う半放任栽培の 3 試験区を比較したところ、子づるのみで収穫を行う整枝方法(孫づる摘心栽培)は作業性に優れ、また採光がよくニガウリ栽培に適した整枝法であった。
- 3)土壌水分に関しては、生育初期はかん水を控え pF2.5 程度で管理すると生育が良好であった。また、かん水量が多いと 1 果当たりの果重は増加するが収穫本数は減少する傾向がみられた。一方、収穫後半はかん水をやや控えると生育良好であり、過剰なかん水は株を弱らせ収量の減少や根の発育を阻害し、ネコブセンチュウの活動しやすい環境を作り出す可能性があると考えられた。